

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 8 月 9 日現在

機関番号：24506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25750150

研究課題名(和文)大規模災害からの被災者の復興過程に関する「復興曲線」を用いた縦断的研究

研究課題名(英文) Longitudinal study on recovery processes from catastrophe by disaster revitalization curve

研究代表者

宮本 匠 (MIYAMOTO, TAKUMI)

兵庫県立大学・総合教育機構・講師

研究者番号：80646711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災の被災者に継続して復興曲線インタビューを行い、特に復興初期における課題と有効な復興支援のあり方について調査を行った。復興曲線インタビューとは、被災者に災害から現在までの心理的な変化について曲線で描いてもらい、こういった要因が被災者の心理的状态を押し上げたり下げたりするのかを明らかにする手法である。その結果、復興初期の被災者が自らについて無力な存在と感じ、未来に希望を抱けないときには、現状をよりよい状態に変革しようというかわりだけでなく、現在の被災者のかけがえのなさを承認しあうようなかわりも重要であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：The present study attempts to visualize the survivors' long-term processes of recovery and revitalization in the affected area of the 2011 East Japan Earthquake. Survivors were interviewed and asked to draw their life courses from the day of the earthquake as curves on the graph with their characteristic dips peaks and plateaus. Obtained curves indicated a variety of revitalization processes depend on the individuals and socio-cultural contexts and provided us with clues to support survivors.

研究分野：グループ・ダイナミックス

キーワード：災害復興 インタビュー 内発性

## 1. 研究開始当初の背景

日本に限らず、世界中で大規模災害が毎年発生している。それらについての自然科学からの災害研究が多くなされる一方で、社会科学による災害研究の重要性も高まっており、近年では社会科学分野における災害研究のハンドブックも発刊された。これらの背景には、自然災害による被害は、単に自然環境における災害因(地震、洪水、地滑りなど)に起因するのではなく、それらが社会構造における諸要素と出会うことによって生まれるのだという社会的脆弱性(Vulnerability)概念の普及もあった。しかし、これまでの災害研究は、緊急時や、短期間の復旧、あるいは防災を扱ったものが多く、長期的な復興過程を扱ったものは希少であった。

日本においても、長期的な災害復興過程に関心が向けられ始めたのは、本格的には1995年の阪神淡路大震災と2004年の新潟県中越地震以後のことである。とりわけ新潟県中越地震では、被災地が高齢化の進んだ過疎集落であり、地震前の状態に戻すだけでは被災地の課題が解決されないことが自明であったため、「復興とは何か」という問いが広まるきっかけとなった。このような学術的及び実践的な要請を背景として、2007年には日本災害復興学会が設立され、「災害復興学」の確立がようやく始まりつつある。こうした背景のもとで、2011年3月11日に発生した東日本大震災は、地震、巨大津波、原子力発電所の事故による複合災害となり、その復興検証は来る首都直下地震や南海地震のような同様の巨大災害の備えとして喫緊の研究課題である。

申請者はこれまで長期的な災害復興過程における被災者支援のあり方について、どのような要件があれば被災者が再び前向きに生きることができるのかを明らかにするために、阪神淡路大震災、新潟県中越地震、そして東日本大震災の被災者を対象に長期的なフィールドワークを行いながら独自のインタビュー手法「復興曲線」による研究を行ってきた。「復興曲線」とは被災者に災害から現在までの心理的变化をあらわす曲線を描きながら復興過程を振りかえってもらうという独自のインタビュー手法である。横軸は時間を表しており、縦軸は被災者の肯定的あるいは否定的な心理状態を表している。阪神淡路大震災の被災者に実施した復興曲線インタビューからは、被災者の心理的な回復を支えるいくつかの要素として、重要な他者との出会いや被災地を一時的に離れること等が有効である一方で、一度、被災や家族を喪失した悲しみから立ち直ったかのように思われた被災者が、震災から2~3年後に再び大きく落ち込むような「二番底」と名づけられる現象がみられることなどが分かった。しかし、インタビューを実施したのが震災15年目の時点であったため、被災者の中には震災当初の出来事を思い出せない方も多く、復

興過程についてのより縦断的な研究の必要性がみられた。新潟県中越地震の被災者に実施した復興曲線インタビューからは、被災地が地震以前から過疎高齢化が進む中山間地域であったため、復興にあたっては、生活基盤の再生だけでなく外部者の存在が、地域の潜在的な可能性に被災者が気づくための媒介として作用していたことが分かり、中山間地域の災害復興における人的支援の必要性が明らかとなった。しかし、中越地震の被災範囲は限定的であったため、人的支援の多様性として、どのような外部人材がどのように関わることで地域復興により貢献できるかが今後の課題となった。東日本大震災の被災地においても、津波や原子力災害により避難生活を余儀なくされている被災者や、その被災者支援に関わる支援者らに震災から1年を振り返る復興曲線インタビューを実施している。

## 2. 研究の目的

本研究では、東日本大震災の同一被災者に復興曲線インタビューを毎年実施することで、大規模災害における被災者の心理的变化に寄与する要件について、とりわけ外部支援者の役割に注目しながら、明らかにすることを目的とする。中でも特に、「復興過程のフェーズに関するもの」と、「外部支援者の類型化」に着目する。前者については、調査期間が震災発生から2~4年後と、ちょうど高台移転の是非を含めた生活再建の方向が定められていく期間に相当するため、より高い被災者の復興感に寄与する生活再建の策定過程の要件を明らかにする。後者についてはその生活再建の策定過程に関わる外部支援者の属性や役割を類型化し、復興過程の初期における効果的な人的支援のあり方を明らかにする。

本研究の独創的な点は、被災者の復興過程を曲線によって可視化する点にある。これまでの研究では、定性的なものとしての「災害エスノグラフィー」の試みや、定量的なものとして「復興カレンダー」の試み等があったが、定性的な試みでは、被災者が復興過程において経験する多様な出来事が被災者にどの程度の影響を与えたのかを把握することが困難であったり、定量的な調査では、未だ未解明な部分も多い復興過程について探索的な研究を行うことの限界が見られた。

「復興曲線」インタビューは復興過程を曲線によって表現することにより、1)長期的な災害復興過程において、どのような出来事がどの程度、被災者の心理の変化に影響を与えたのかを把握できること、2)多様な出来事からなる復興過程をあえて一本の曲線で表現することで、被災者間での比較が容易になること、3)曲線を総体として見た時にどのような要素が短期的な心理の影響を与え、どのような要素が長期的な心理の変化(あるいは維持)に影響を与えたのかを把握できること等

の利点・特色がある。

### 3. 研究の方法

東日本大震災の同一被災者に毎年復興曲線インタビューを行った。ここでは、筆者が震災直後から交流を続けている宮城県気仙沼市唐桑半島で被災したBさんの経年変化を紹介し、考察を行う。

### 4. 研究成果

以下の図1、図2、図3が、Bさんの震災1年後、2年後、3年後の復興曲線である。

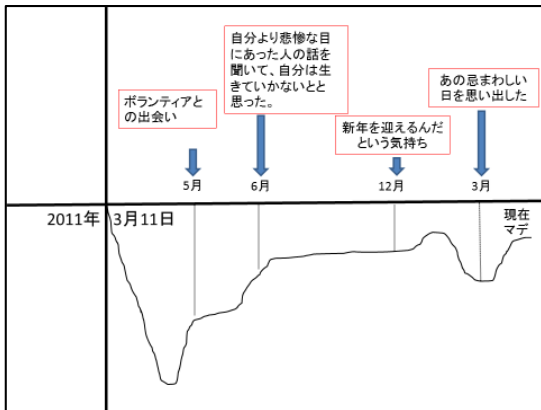


図1 Bさんの1年目の復興曲線

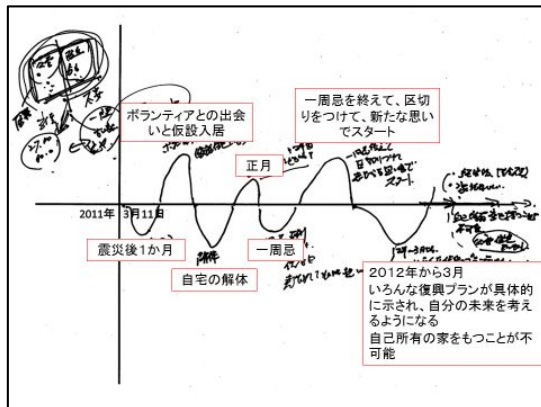


図2 Bさんの2年目の復興曲線

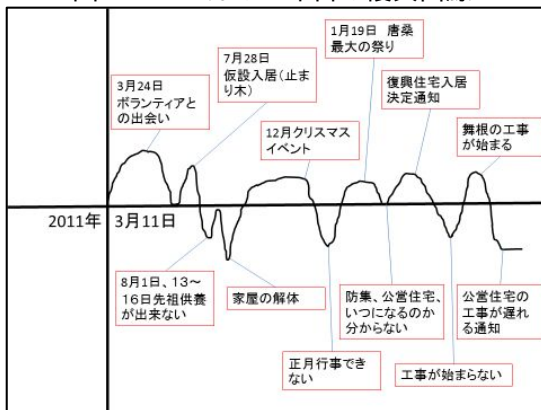


図3 Bさんの3年目の復興曲線

復興曲線インタビューで語られたことの中で特徴的であったのは、2年目の復興曲線インタビューの時に語られた「先が見えなくてしんどい」ではなく、先が見えてしんど

い」という言葉だった。「一年前より、逆に気持ち悪くなっている。具体的に示された、それに我々がのっていかねばならない。そうすると、意に沿わないことも出てくる。一年前は、毎日、毎日、充実した中で生きてきた。そんなこと考えなかった。」第1回の復興曲線では、ボランティアとの出会いが中心となって語られたのに対して、第2回ではそれと共に、具体化される生活再建の道筋に向き合うことの辛さが語られていた。なぜ、復興の一端となる高台移転の用地確保や、解体の進捗が、そのまま被災者が前向きに生きていくことができることにつながらないのだろうか。一方で、復興曲線が上昇したのは、いずれもボランティアとの交流に関連するイベントや祭りであった。それらは、生活再建に直接結びつくものではない。どうして、生活再建に結びつかないものが、曲線を上昇させたのか。

肥後功一は、「めざす」かかわりと「すごす」かかわりという興味深い議論を展開している。「めざす」かかわりは、現状をよりよいものに変革するかかわりであり、通常の復興支援、例えば生活再建を支援するような関わりは、この「めざす」かかわりである。「めざす」かかわりの落とし穴は、対象が自分自身について無力感を抱いているときに、それでも「めざす」かかわりをとられると、その反作用として、対象の無力感を強めてしまうことである。なぜなら、現状をよりよい未来に照らしあわせて変革しようという態度は、暗黙の内に現状の否定を含んでいるからである。そんなときは、それに対して、「すごす」かかわりがとられることが重要である。「すごす」関わりとは、「変わらなくてよい」ことを前提とし、対象のかけがえのなさを承認するかかわりである。本研究結果より、復興の初期において、被災者が未だ自らの再建方針や未来について希望を抱けない段階においては、純粋な生活再建を志向する「めざす」かかわりをとるだけでは、被災者の無力感を帰って強めてしまうことが分かった。そのときは、被災者のかけがえのなさを承認する「すごす」かかわりが同時にとられることで、被災者の復興は振幅を繰り返しながら前に進めることが分かった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

宮本匠 (2015) 災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり 東日本大震災の復興曲線インタビューから 質的心理学研究, 14, 6-18. 査読有り

宮本匠 (2016) 現代社会のアクションリサーチにおける時間論的態度の問題 実験社会心理学研究, 56, 60-69. 査読有り

〔学会発表〕(計 11 件)

Miyamoto, T. (2013, 24th, August) Visualization of Post-Disaster Revitalization Processes: Revitalization Curves from the 2011 Tohoku Earthquake, The 10th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, インドネシア(ジョグジャカルタ)

宮本匠 (2013年7月14日) 東日本大震災における内発的発展と外部者の役割「津波後は旅のものに満たされる」三陸海岸から, 日本グループ・ダイナミクス学会第60回大会発表論文集, pp.6-9, 北星学園大学(北海道・札幌)

宮本匠 (2013年8月) アクションリサーチの時間論 <めざす> かかわりと <すごす> かかわり, 日本質的心理学会第10回大会, pp.62-62, 立命館大学(京都・京都)

宮本匠 (2013年9月21日) 復興曲線による災害復興研究(2)-震災から3年を迎える東日本大震災の被災地から-, 日本心理学会第77回大会, 札幌コンベンションセンター(北海道・札幌)

宮本匠 (2013年9月24日) 災害復興の時間論-めざす支援とすごす支援-, 第32回日本自然災害学会学術講演会, pp.75-76, 北見工業大学(北海道・北見)

宮本匠 (2013年10月12日) 災害復興と時間-めざす復興とすごす復興-, 日本災害復興学会2013大阪大会講演論文集, pp.64-65, 関西大学(大阪・高槻)

宮本匠 (2014年9月7日) 「当事者研究」としての人間科学のデータの可能性, 日本グループダイナミクス学会第61回大会発表論文集, pp.34-37, 東洋大学(東京・文京)

宮本匠・矢守克也 (2014年9月7日) 再考: 人間科学のデータ, 日本グループダイナミクス学会第62回大会発表講演集, 東洋大学(東京・文教)

宮本匠 (2014年9月10日) 復興曲線による災害復興研究(3) 日本心理学会第77回大会, 同志社大学(京都・京都)

宮本匠 (2014年9月24日) 新潟県中越地震の復興過程と外部支援者の役割の変遷について 第33回日本自然災害学会学術講演会, 鹿児島大学(鹿児島・鹿児島)

宮本匠 (2014年10月18日) 災害復興の時間論 日本質的心理学会第10回大会, 松山大学(愛媛・松山)

〔図書〕(計 3 件)

宮本匠(2013) 第21章復興のプロセス 日本発達心理学会編 発達科学ハンドブック7 災害・危機と人間 新曜社 pp.209 - 217.

宮本匠(2014) Q29/Q30 矢守克也編著 被災地デイズ 弘文堂 pp.137-143.

矢守克也・宮本匠編著 (2015) 現場でつくる減災学 新曜社

宮本 匠 (MIYAMOTO, TAKUMI)  
兵庫県立大学・総合教育機構・講師  
研究者番号: 80646711